令和５年度

ほがらか家族

明るい家庭づくり作文集

（瀬戸内市優秀賞受賞作品）

©瀬戸内市

瀬戸内市教育委員会

岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会

はじめに

公益社団法人岡山県青少年育成県民会議及び岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会では、家庭の役割、家族のあり方など、「明るい家庭づくり」をテーマとした作文を募集しており、家庭教育等の重要性について意識の向上に努めております。

令和５年度は、瀬戸内市内で７５８点の応募作品があり、その中から瀬戸内市の優秀賞１３点、優良賞２０点及び佳作賞７０点を選定しました。

この文集「ほがらか家族」は、瀬戸内市の優秀賞作品を掲載したものです。この文集が、日常のしあわせへの気付きや、家庭の教育力の向上の一助となり、青少年の健全育成活動へとつながることを心から願っております。

令和６年２月

瀬戸内市教育委員会　教育長　東南　信行
岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会　会　長　神坂　俊規

瀬戸内市優秀賞受賞者一覧

〔小学生の部〕

題　　名	所　　属	氏　　名
おかあさんとちょうせんした山のぼり	国府小学校　１年	野村都羽
わたしのお気に入りタイム	邑久小学校　２年	北野なつみ
お手伝いとありがとう	邑久小学校　３年	安原彰吾
ぼくの一番悲しかったこと	邑久小学校　４年	丹下　陸
ぼくの大切な家族	国府小学校　５年	内海橙太
野菜の出荷	牛窓北小学校　６年	木山　洵

〔中学生の部〕

私のじまんの家族	邑久中学校　１年	杉田愛美
心の準備をくれた時間	邑久中学校　２年	酒井大我
最高の応援団長	邑久中学校　３年	小川椅吏

〔保護者の部〕

祖父と娘と小さな畑	邑久幼稚園	古谷真子
今日嬉しかったことは？	邑久小学校	神寳　舞
子どものやる気を持続させるためには	邑久小学校	大河原崇視
私の宿題	国府小学校	宮本和子

小学生の部

岡山県佳作賞

おかあさんとちょうせんした山のぼり

国府小学校　１年　野村　都羽

「ヤッホー。」
山のちょうじょうで、おおきなこえでさけびました。いつもはおおきなこえがでないのに、山のちょうじょうにいくと、びっくりするぐらいおおきなこえがでます。おおきなこえをだすと、こころがすっきりします。

わたしはときどき、おかあさんといっしょに山のぼりにいきます。ことしのはる、えひめけんのいよふじという山にふたりでちょうせんしました。いよふじは、せんななひゃくごじゅうろくメートルの山です。

サンタさんにもらったストックはわたしのたからものです。おかあさんに、あたらしいザックととざんぐつをかってもらったので、とてもわくわくしました。

おかあさんとおはなをさがしながら、ゆっくりのぼりました。つかれたときは、ふたりでいわにすわって、こうどうしょくをたべました。あせをかいたので、しょっぱいものがおいしかったです。

ちょうじょうにちかづいてくると、おかあさんは、わたしよりさきにへとへとになりました。わたしはいつもランドセルをせおってがっこうにいくので、おかあさんよりたいりょくがあります。でも、いわがゴロゴロしていて、だんだんあしがおもくなりました。あとすこしなので、ゆっくりゆっくりのぼりました。

ちょうじょうにつくと、みんなが、
「小さいのにすごい。」
といって、はくしゅをしてくれました。がんばってよかったなとおもいました。おかあさんもにこにこしていました。そらをみると、くもがとてもちかくにかんじました。そらと山をみながらふたりでおにぎりをたべました。いつもよりひゃくばいおいしかったです。つぎはもっとたかい山におかあさんとふたりでちょうせんしたいです。

岡山県優秀賞

わたしのお気に入りタイム

邑久小学校　２年　北野　なつみ

「あー。今日もつかれた。」
このおかあさんの一言でわたしの大すきなじかんがはじまる。わたしの大すきなじかん、それはふとんの中でかぞくみんなそろって、一日の出きごとを話したり、しりとりをしたりするときだ。

とくにわたしはおねえちゃんといっしょにおかあさんのマッサージをするときがわくわくする。わたしが、
「マッサージしてあげようか。」
と言うとおかあさんがえがおで、

「え、ほんまにいいん。」
と言ってうれしそうにしている。わたしがマッサージをするとすぐねむりについてしまうが、そのうれしそうなかおをおねえちゃんといっしょに見て二人でくすくすわらうのがすきだ。このときおかあさんがわたしたちのことをしてくれている、だからすこしでも力になりたいと思う。このことをおかあさんにつたえたらおかあさんは、
「その気もちだけで十分。なつみたちが元気にすごしてくれることがなによりものささえだからね。」
と言ってくれた。このことばを聞いてわたしも、うれしくなった。そしておかあさんがかけてくれたことばが元気になるおまじないみたいにかんじた。
　おかあさんは、おこったらこわいし、ケンカをするときだってあるけど、その分かぞくのことを考えてくれていて、とてもたよりになる。だからわたしは、どんなおかあさんも大すきだ。これからも、おかあさんのお手つだいをしてわたしのお気に入りタイムをたのしみたい。

岡山県佳作賞

お手つだいとありがとう

邑久小学校　３年　安原　彰吾

「二人に手つだってもらいたいな。」
お母さんの一言から始まった、姉とぼくのお手つだい。
　妹が生まれて仕事を休んでいたお母さんが、仕事にもどる時にお手つだいのおねがいをしてきました。本当のことを言うと、ぼくは少しだけしたくないと思いました。でも、姉がうれしそうだったので、ぼくもしてみようと思うことにしました。
　ぼくと姉は、たん当の曜日を決めて、せんたく物をたたむことにしました。でも、曜日でせんたく物のりょうがちがったり、今週お姉ちゃんが三日でずるいとかで、手つだいがイヤになってけんかになってしまいました。そして、お風ろそうじをたん当させてもらうことになったぼくは、水遊びみたいで楽しくて、これならずっとできると思ってがんばりました。それでも、冬になると寒くてイヤになって、
「やりたくない！」
と言うようになりました。今は、話し合いをして、ぼくがせんたく物たたみとはいぜん、姉がせんたく物ほしと米とぎで落ち着きました。
　これがきっかけで思ったことがあります。お手つだいのぼくたちは、「これをする」とか「これならできる」と、決めることができます。けれど、お父さんとお母さんはやりたくなかったり、つかれていても毎日家族のためにしてくれています。それなのにぼくは、
「たたむ物が多いからイヤだ。」
「寒いからイヤだ。」
とわがままを言ってしまいました。おいしいごはんやきれいな服は、お父さんとお母さんが、がんばって仕事や家のことをしてくれているからなんだと分かりました。
　また、もう一つ分かったことがあります。それは「ありがとう」の気持ちをつたえる大切さです。お手つだいをすると、お父さんやお母さんが、
「お手つだいありがとう。」
と言ってくれます。ぼくはとてもうれしい気持ちになります。でもぼくは、毎日家事をしてくれているのに、ありがとうと言えていなかったと思いました。少しはずかしいけれど、これからは思っ

た時にすなおにつたえたいなと思いました。
　そして、大切なことを教えてくれた、お手つだいにもありがとうと言いたいです。

岡山県優秀賞

ぼくの一番悲しかったこと

邑久小学校　４年　丹下　陸

　ぼくのかあちゃんが、がんになった。思い出すのは少し悲しいけど、家族にとって一番大きな出来事だったので書くことにした。
　金曜日の夜ごはんを食べ終わったころ、かあちゃんから、
「大事な話がある。」
と言われて、なんだろうと思いながら目の前にすわった。
「かあちゃんに病気が見つかったの。がんって言う病気でこれから薬でかみの毛がぬけちゃうけど、一生けん命なおすから家族みんなに協力してほしい。」
となみだをこらえた顔で言っていた。ぼくは、頭の中が真っ白になった。ふ安でふ安でなみだがとまらなかった。とても悲しかった。家族三人で記念写真をとった。それからかあちゃんのちりょうが始まった。週に一度こうがんざいの注しゃをしていてあとがのこるたびにいたそうだった。しばらくしてかあちゃんは毎日ハデなしゅみの悪いぼうしをかぶるようになった。ぼくはあまり好きなぼうしじゃないので早くとってほしいと思った。おふろ上がりに見せてもらった。びっくりして石のように固まってしまった。かあちゃんじゃないみたいだった。生まれたて赤ちゃんみたいになっていた。かあちゃんは、はずかしそうに泣きわらい顔でこっちを見ていた。
　二〇二三年一月十三日に手じゅつをした。入院中はコロナで会えなかった。こんなに長い間はなれているのは初めてだったので、一日がとても長く感じた。たったの二週間がどうしてこんなに長く感じるのかふしぎだった。でも毎日ライン電話をしていた。電話のかあちゃんはいつも通り元気そうだったので早く帰ってきてほしかった。その願いが神様に伝わったのか予定より早く帰ってきた。
「おかえり。」
ぼくはうれしくて、うれしくてたまらなかった。ひさしぶりに見たかあちゃんは、こしが曲がっていてゆっくり歩いていた。
「ただいま。陸に会いたくて早く帰ってきたよ。」
かあちゃんはニコニコしているけど、まつげがぬれて目が赤くなっていた。かあちゃんが元気になるまで少しの間、じいじとばあばの家ですごした。毎日トランプ大会をした。それはそれで楽しかった。少しずつこしがまっすぐになったので家に帰った。とうちゃんは、一人で心細かったのか、うれしそうだった。それからのかあちゃんは、毎日ごはんやせんたく物などをしてくれて今までとかわらないパワフルなかあちゃんだ。今ではトイプードルみたいになったかみの毛も生えてきた。スマホで犬の写真を見せて、わらかしてくる。そんなかあちゃんが大好きだ。
　これからはお手伝いをして、かあちゃんを助けていこうと思う。ぼくの決意表明だ。

岡山県優良賞

ぼくの大切な家族

国府小学校　５年　内海　橙太

五年生の夏休み、ぼくは岐阜に住んでいるばあばの所へ行くと決めてた。なぜなら、ぼくが三年生の時に、天国へ旅立ったじいじに会いに行くためだ。

今年は中学生になったお姉ちゃんが、中国大会の切っぷを手にし、夏休みなのに、朝早くから自転車で学校へ行き、毎日一生けん命に部活をがんばっている。そんな様子を見たお父さんが、

「パパが、家族代表で会いに行ってくる。」

と、話すのを聞いて、ぼくはなんだか心配になり、

「ぼくもいっしょに会いに行く。」

と、大好きな愛犬の頭をなでながら、いつもより大きな声で言った。こうして、初めての男二人旅となった。

いつもは車を使っているが、今回は新幹線にした。新幹線に乗るのはひさしぶりだったし、お父さんと二人なのでドキドキしていた。お母さんとお姉ちゃんが、岡山駅の新幹線ホームまで送ってくれた。お母さんは、

「ばあばによろしくね。あいさつするんよ。行ってらっしゃい。」

とドアがしまるまで、たくさん声をかけてくれた。お母さんの言葉は、いつもうるさいと感じてしまうけれど、今日だけは、不思議と安心して出発する事が出来た。

岐阜に着くと、いとこの家族がむかえに来てくれていた。ばあばやおばちゃんは、ぼくの大好物の肉料理を、たくさん作って食べさせてくれた。そして、じいじのおぼんく養が始まった。順番にお線香を立て、手を合わせた。孫のぼく達は、ばあばが折り紙で作ったおふだに、一まいずつ自分の気持ちを、それぞれ書いて発表した。今の気持ちを、みんなの前で読むこの行事はきんちょうするけれど、意外とぼくは好きだ。じいじも毎年みんなの気持ちを聞けて、絶対にうれしいと思う。写真のじいじが、いつもより笑っているように見えて、ぼくもいっしょに笑っていた。ばあばが、

「お父さんだけが来ると思っとったから、いっしょにきてくれて、じいじもよろこんどるわ。」

と言ってくれた元気なすがたを見て、本当に来て良かったと心から思った。

いつもぼくは、岡山でくらしていると、岐阜に住んでいるみんなの事を、毎日思い出す事はない。だから、つい自分の家族は家の中にいる人、と思ってしまっているけれど、遠くはなれた場所にも、ぼくを大切に思ってくれるばあばや、いとこたちがいてくれて、温かい気持ちになれる「家族」がある事に、今年の夏休みは改めて気づかせてもらえた。

もう会う事が出来なくなってしまった、天国のじいじも、ずっとずっとぼくの大切な家族だ。

岡山県佳作賞

野菜の出荷

牛窓北小学校　６年　木山　洵

夏休みのはじめの日、あばあちゃんに、

「洵くん、出荷のお手伝いして。」

と言われた。おじいちゃんとおばありゃんが作っている野菜を出荷するのだ。ぼくは、めんどく

さいし行ったらたいへんだと思い、どうしても行きたくなかった。泣きながら、
「行きたくない。」
とうったえた。滉兄ちゃんは、
「どうせ遊びたいだけやろ。」
と冷たく言う。ますます行きたくなくなったが、行かなかったら後がうるさそうで仕方なく行くことにした。
　おじいちゃんの軽トラで、邑久のはなやかという所に着いた。そこは前にいとこといっしょに買い物に来たことがある所だったのでおどろいた。今日はまったくちがう立場で入り、仕事をすることになった。
　仕事の内容は、なぞの機械を使ってバーコードのシールを作る・野菜にはる・並べるというものだった。おじいちゃんに教わると、一回で覚えた。早く作業できると、おじいちゃんはおどろいていた。ぼくは簡単にマスターした。しかし、はるときに向きを逆にしたり、下の方にはったりして、何回か失敗してしまった。でも売り出した時に、さっそく買ってくれる人もいて助かった。
　家に帰ってしばらくしていると、はなやかからメールが届いた。そこには今日の売り上げが書かれている。今日はいつもより多く売れていることが分かった。おばあちゃんは、
「洵くんが手伝ってくれたからじゃ。」
と笑っている。おじいちゃんは、
「いつもより多く売れたから洵に三割あげよう。」
と、お金をくれた。だけど、バーコードのシールは一枚一円するので、ぼくがはりまちがえたことで五、六円もむだにしたことやおじいちゃんは売り上げの二割をはなやかに出さなければならないことを後で知った。おじいちゃんはやさしい。ぼくは申しわけない気持ちになった。
　別の日は、前回よりもたくさんの売り上げがあった。出荷のついでに、おばあちゃんのお姉さんに会った。たくさんとれた野菜をわたすためだ。おばちゃんは、
「ありがとう。すごい量の野菜じゃ。」
と、大喜びしていた。
　次の出荷では、ぼくは前よりも、バーコードはりがうまくなっていた。野菜を置く時も買う人のことを考えるようになった。いっしょに作業をしていると、おじいちゃんは、自分の野菜に自信をもっていることが、伝わってくる。元気に楽しくやっているのもすごい。うちの野菜は最高だ。新鮮で心がこもっている。たくさんの人が喜んでくれる。人が喜ぶのを見るのはうれしい。初めは行きたくなくて泣いていた自分。たいへんだけど、いい仕事だと思えるようになった。おじいちゃん、おばあちゃん、ありがとう。また手伝うよ。

中学生の部

岡山県佳作賞

私のじまんの家族

邑久中学校　１年　杉田　愛美

私の家族を紹介します。私の家族は六人家族と一匹です。いつもにぎやかで面白い所がじまんです。そこで、家族のよい所を自分なりに考えました。

まず一人目の、我が家の大黒柱のお父さんのよい所は、静かでおだやかで何より家事に協力的な所です。お母さんに聞いてみたところ、お父さんは「つかれた」と言う言葉を結婚して二十一年間で一回しか聞いたことがないと言っていました。それを聞いて私もお父さんが弱音をはいているのを聞いたことがなかったからすごいなと思いました。

二人目の、どんなことも一生懸命なお母さんのよい所は、明るい所と面白い所で、しゃべるとトークバラエティを見ている感じです。ですが、実はまじめな所があり、しっかりしています。仕事も一生懸命やっています。お母さんはボケたりして長女がツッコミをしたりするのでまん才をしている感じがとても面白いです。

三人目の、我が家の指揮官的存在の長女のよい所は、しっかりもので明るい所とかなりの不思議ちゃんで毎日、面白い事を言って笑わせてくれたり、ツッコミとボケが上手な所です。長女は、まじめな人で幼いころから自分のことはちゃんと自分でできる人です。長女らしいなと思います。

四人目は、ザ・優しいお姉ちゃん次女のよい所は、冷静、大人しい、勉強ができる、人の気持ちが考えれるで、空気が読める、優しくて思いやりがある所です。私がふざけたりしたら一緒にふざけてくれたりする面白い一面もあります。勉強ができて頭がいいのでうらやましいです。

五人目の、私の唯一の妹末っ子のよい所は、まけん気が強く自分の意志が強い所です。家ではよく歯むかってきますが、友達には優しいみたいです。妹はメイクをすることが好きでよく自分でやっています。好きなことをとことんやっています。

最後に、我が家のアイドル的存在の飼っているペットうさぎです。名前はふわちゃんといいます。よい所は、だいぶおちゃめで、人間の歳では五十二歳ぐらいでも、食欲おうせいな所です。ごはんを持ってくる音だけで飛んで来てすごい勢いで食べます。他に、だっこは苦手ですがなでてほしいと甘えてくれるところがとてもかわいいです。

そんなたくさんじまんするよい所がある私の六人家族プラス一匹は、イベントも大好きです。今年のゴールデンウィークでは、バドミントン大会をしました。総あたりでして、順位もつけて、賞品は三位までお母さんが用意しました。その日は、雨がぱらぱらと降り風がふいていましたがみんながんばって対決しました。まさかのだれも予想していなかったお父さんが全勝して一位になりみんなでびっくりしていました。お母さんは自分で三位になると思い賞品を三位まで用意していましたが、四位でした。二位は長女で、三位は次女で、五位は私で、六位は妹という結果になりました。しっかり体を動かし楽しめました。

去年の夏は、結婚記念日にすごろくを手作りしたもので遊びました。クイズは次女が考え、絵をかいたりしました。すごろくは次女と私と妹三人で進めがんばりました。すごろくのコマも次女が手作りし、家族全員幼ち園児の服を着ているイラストをかいていました。とてもかわいかったです。最後のマスには全員ストップで「家族一人一人のよい所を言う」として言えたら終わりにし

ました。すごろくが終わるころにはすでに二時間していました。

最後に私のよい所を聞いてみました。よい所は、お母さんが忙しい時にごはんを作る所、ちょっとほんわかしたふんいき、ある程度優しい、ムードメーカーとまじめと言ってくれました。

家族のよい所を探してみて気付いたことは「みんなちがってみんないい」です。一人一人よい所や悪い所、得意な事や苦手な事がちがうのでみんなで支え合いながらくらすことが大切だと気付きました。だから私は、家族の一員であることをうれしく思い、家族のみんなを支えられるようにがんばりたいです。

岡山県優良賞

心の準備をくれた時間

邑久中学校　２年　酒井　大我

コロナ禍の今、最期を迎える人は、残酷だと思った。パンデミックの悲劇を、目の当たりにする。今年、がんで亡くなった祖母の事。今から二年前、がんの告知を受けた。コロナ禍ですぐに検査ができず、発覚した時はステージ4の進行がん。それから、治療を頑張っていたのに、今年亡くなった。

大学病院に重とくで入院しているとき、１８歳以下は面会を制限された。入院している時ほとんど会えず、会話も少しだけしかできなかった。退院してから自宅に会いに行ったが、意識は全然無い。むごいなと思う。自宅に帰って3日後に亡くなった。

色んな過去を思い出す。母は、中々子どもができず高齢出産で僕を産んでくれた。その時、出産に立ち会ってくれて、一番に喜んでくれた祖母。僕が保育園に入るまで、母が仕事に行っている時は、いつも世話をしてくれた祖母。

「かわいい。」

「かわいい。」

と言って、くっついてきたことを思い出す。その時ベタベタされると、嫌だなと思うことがあった。今、振り返ると…もう一度抱きしめて欲しいと思った。トンカツやからあげを、よく作ってくれた料理の味を覚えている。失うといろんな感謝を感じるんだなと思った。もうこの世にいないんだと実感がわかない。考えると…後悔に尽きる。

さかのぼること一年前、コロナ感染者が拡大して、思ったように会う機会がない。抗がん剤治療がきつくて、体調をくずしていた。病気でなかったら、たくさんコミュニケーションをとっていただろうか？祖母をみつめる時間をくれた気がする。

がんは、考える時間をあたえてくれる病気だと思う。だから、僕に祖母と心のコミュニケーションをとれる時間をくれたと思った。タイムスリップして時間をくれたように感じる。後悔しないように。母からおばあちゃんが余命6カ月と聞いてショックだった。そして迫りくる時間を感じた。後どのくらい一緒に楽しい時を過ごせるだろう？本当に6カ月しかこの世にいないのか？祖母が、

「高校に、入学する姿、見れるかな？」

と僕を触ってくる。ちょっと泣けた。まだ、僕の成長を見届けて欲しい。余命6カ月の宣告を受けてあせってしまう。だから、祖母に優しくしたいとより強く思った。僕にできることをしよう。

まず一つ目は、僕が赤ちゃんの時ひな鳥のような口を開けて離乳食を食べたり、いっぱいほお張ったり、笑いながら食べさせてくれたと母が言っていた。その時から今まで料理してくれたから、楽しい食事を提案しよう。そこで、最後に僕がなべを作って家族みんなで囲んで食べた。祖母は、あまり食べられなかったけど、ニコニコ喜んでいた。

二つ目は、全身マッサージをした。祖母が背中に手が届かないから、気持ちが良いと幸せそうにほほえんでいた。祖母の背中は小さくなってやせている。僕は、すごいやせていることを改めて感じた。会った時は僕の得意なマッサージをしてあげようと思った。

残り少ない時間を与えてくれたから、家族にできる事を少しでも後悔のないよう最後の入院までは心の準備ができたと思う。そして、死を受け入れた。昨日まで生きていた人が今日は死んでいる。うその様だった。

祖母が最後の会話で、

「たくさん優しくしてくれてありがとう。」

と言った。ぐっと、悲しみが込みあげてきた。切ない…。僕の事を、

「優しい子。」

「優しい子。」

と言いつづけてくれた祖母。自分では優しい人間かは分からないが祖母の遺言として、心がけようと思う。

この夏休み、祖母が亡くなって３カ月が経ち、初盆だ。祖母が大好きなプリンをお供えした。そのあと、僕が食べた。おいしいプリンだった。最後は食事が出来なかった事を思い出す。悔やんだ。たくさんプリンを食べてもらいたかった。元気な時に、気づくのが大切だと思う。祖父と遺品整理の片付けをしていると、僕の写真がたくさん出てきた。その裏に日付と成長の記録が書いている。うるっと、涙が出た。天国からも成長を見届けて欲しい。

最後に、僕に気づく事を与えてくれた時間。それを教えてくれた祖母。

一生忘れない。ありがとう。

岡山県優良賞

最高の応援団長

邑久中学校　３年　小川　椅吏

「もう一回、ゆってみ?」

僕の母がこの言葉を言う時は、僕の言う事が間違っていて、母が激怒している時です。

母は、好き嫌いがはっきりしていて、間違ったことや良くない言葉を発していると本気で怒ります。僕が祖父母に対して、暴力的な言葉や言ったら傷つく言葉をつい言ってしまうと母は激怒して、この言葉を言います。

幼い時から言われていたので、自然とこの言葉を母に言われた時は、「ヤバッ、怒ってる。」と学習しました。

中学生になり反抗期を迎えた今も同じです。威圧的な態度で母に反撃しますが、母の背をかなり追い越した僕にも、母は引きません。

僕には、父親がいません。けれど、それに対して母に理由を聞いたことも、責めた事もありません。

保育園に通っている時、父親に肩車をされて自慢してきた子がいた時も、母は、黙って抱っこして帰ってくれました。母が、

「抱っこしかできんくって、ごめんね。」

と小さな声で言ったことが、今でも僕の頭から忘れられません。

僕と母のことを、「かわいそうだ。」という人もいました。祖父母は、

「両親がそろっていると幸せで、片親なら不幸せって誰が決めるの？椅吏が幸せならそれだけで、

ママも幸せなんだよ。」
と言いました。幼心にも僕はその時から、「母を守る。」と心に誓いました。
　中学生になり、苛々して家族に八つ当たりの毎日が続きます。部活で毎週末が練習試合の僕に、母は毎日たずねてきます。
「今日はどんなんだった？」
「別に。」
　会話になっていないのに、母は嫌な顔せず、毎日聞いてきます。そして母の毎日の様子を話してきます。
「今日ね、仕事でね…。」
　初めはうっとうしいと思っていましたが、毎日どんな思いで働いているのかが、だんだん分かるようになり、申し訳ないなと思うようになりました。
　コロナ禍で、一年、二年はほとんど練習試合を見てもらう事が出来ず、ゲームさえ出ていなかった一年の時も、様子を必ず聞いてくれました。
　三年最後の総体初戦で、怪我をしてしまい病院へ行く車中で、母は何も言いませんでした。ただ悔しく泣いている僕と一緒に泣いてくれました。
「悔しいんか。でもな、総体はここでリタイアだわ、県大会へ向けて絶対に治してリベンジするよ。」
　母が何を言っているのか分かりませんでした。総体で県大会出場できる保証もなく、何で勝手にリタイアって決めるんだと、怒りでどれだけの暴言と悪態をついたかしれません。でも、母は黙って聞いていました。僕がどんなに頑張ってきていたか、一番知っている母から言われたその言葉は、ショック過ぎて腹が立ちました。そんな僕に母はこう言いました。
「怪我をしている椅吏は正直、今のチームには邪魔でしかない。仲間を信じて、お前が一番にすることは何か考えろ。怪我を治すことでしょ。怪我がなんだメソメソすんな。悔しかった分、絶対に治して県大会でリベンジしろや。」
　母の言葉は、落ち込む僕に直球で刺さりました。
　それから毎日、毎日、どんなに遅くなっても病院へ通ってくれて、三週間で治り、母とハイタッチして大喜びしました。
　県大会では、初戦から出すと言われていたのに出番がなく二度悔しい思いをしました。控えベンチに戻って母に
「ごめんな、少ししか試合に出れんくって…病院、毎日連れて行ってくれたのに、ほんまごめん。」
と言うと、母は、こう言いました。
「そんなこと言いたいんじゃないだろ。」
　それは自分の欲しかった言葉。「残念だったね。」ではなく。その言葉がなぜか嬉しくて、でも悔しくてトイレで泣いてしまいました。
　自分が出ていたら勝てた。帰りの車で試合に出られると思っていたのに出られなかった悔しさ、出すという言葉を信じていた悔しさを全部吐き出しました。母も、同じように怒って、泣いてくれました。
　県大会後、抜け殻になった僕に何も言わず、
「そばにいるから、でも区切りをつけて立ち上がるのは椅吏自身。」
そう言って背中を押してくれました。
　母の息子で良かったと思っています。いいえ、母の息子に産まれて良かったと心から思っています。
　喧嘩もする、バカみたいに大笑いする事もあります。でも、間違いなく、僕の最高の応援団長は母です。

保護者の部

岡山県優良賞

祖父と娘と小さな畑

邑久幼稚園　古谷　真子

　娘を出産した日、嬉しくて幸せを噛みしめていた夜に、私は大量出血をし、危険な状態になった。私の母が力強く手を握って、
「起きられ！」
と、目を閉じそうになる私に、何度も声を掛けてくれた。また、あの世の入口では、私が小学校低学年の時に亡くなった祖母が現れ、
「まだ来たらいけん。はよ、帰られ。」
と言ってくれた。そのお陰で、私は今、娘と祖父（私の父）が汗びっしょりになりながら、一緒に野菜を収穫する姿をこの目で見られている。生きているからこそ見れる光景であり、私はとても幸せ者だなと思う瞬間である。
　この小さな畑は、娘が０歳の頃から作り始めた。畑の土づくりからスタートしたが、これが想像以上に大変だった。土が固すぎて、トラクターが跳ねる、暴れるのてんやわんやだった。
　娘は、その様子をベビーカーから見守り、時に面白そうに笑っていた。やっとのことでミニトマトやキュウリ、そして娘が生まれた記念に買っていたミカンの木を植えた。
　娘が一歳の頃、
「おじいちゃん、私も水やりする。」
と、小さな長靴を履いた娘が、小さなぞうさんじょうろを持って、祖父の後ろをついて歩き、野菜に水やりするようになった。祖父に、
「じょうろの鼻の所を支えてあげると上手にできるよ。」
と、教えてもらったが、水やりをしているのか、水遊びをしているのか分からない程、服が上から下までびっしょりと濡れていた。
　娘が二歳の頃、冬に祖父が苺の苗を買ってきた。
「これを上手に育てたら、春にはたくさん苺が食べられるよ。」
と聞いて、好奇心旺盛な娘は、小さいながらも、何でも自分でやってみたい性格だった為、早速、毎日水やりをしたり、観察したりし始めた。
　春になり、白い花が咲いているのを見て、
「白い花が咲いてるよ。可愛いね。」
「苺、もうすぐできるかな。」
と待ち遠しそうに苗を見つめる娘の姿が、なんとも可愛らしく感じた。
　苺が赤く色づき始めた頃、祖父から、
「実が赤くなっているのは甘いよ。青いのは、まだすっぱいからね。」
と教えてもらい、初めて自分で苗から育てた苺を収穫した。甘酸っぱい苺の味が口いっぱいに広がると、娘はとても幸せそうな表情をしていた。まだ青い苺は食べられないと祖父から教わっていた娘だったが、
「青い苺も食べてみたい。」
と収穫して食べては、

「青い苺も美味しい。」
と喜んでいた。
　自分で一から育てた苺は、娘にとって「特別な苺」だったのだと思う。
　娘が三歳になった今年の夏、あのみかんの木は、昨年より背が伸び、実が増えてきた。
　私も、祖父や娘に負けないように、トラクターを押して土づくりをしていると、「おじいちゃん、畑しようよ。」
と娘の元気な声が聞こえてきた。
「今度は何を育ててみようか。」
と祖父と娘の楽しい野菜づくり会議が始まりそうだ。
　自分が死に直面した時に、命が消えるのって一瞬なんだと身をもって知ってしまったから、生きているうちに娘に教えてあげたいことの一つとして畑づくりを選んだ。畑づくりを通して学んだことは三つある。一つ目は、自分で育てた野菜を収穫して食べる「食育」を身近に体験できたこと。二つ目は、何事も挑戦したい娘の気持ちを大切にし、伸ばすことができたこと。三つめは、もの知りな祖父と一緒に様々な経験を通して、興味・関心の幅を広げることができたことだ。
「葉っぱが、お水欲しいって言ってるよ。」
と気づいて水やりをしたり、野菜の本を見て、
「おじいちゃん、次はこれ作ってみようよ。」
と提案したり、祖父に手を添えてもらい、ノコギリやドライバーを使って畑の柵を一緒に作ったりすることもできるようになった。
　私が次に娘に教えてあげたいことは、娘が最近興味をもち始めている「料理」である。祖父と娘が作った野菜を使って、娘と一緒にいろいろな料理を作ったり、食べたりして楽しみたいと思う。

岡山県佳作賞

「今日嬉しかったことは？」

邑久小学校　神實　舞

　コロナ禍のある日、娘が、
「寝る前にその日にあった嬉しかったことや、楽しかったことを1つずつ話そう。」と言い出した。娘が言うには、コロナ禍で学校に行けなかったり、不安になるニュースを毎日見ていると、気分が落ち込んでしまうので、寝る前ぐらい気分を上げて眠りたいから試してみたい。とのことだった。
　それからというもの、毎晩布団に入ってから、
「今日嬉しかったことは?」
と、どちらからともなく声をかけることが日課になった。
　私は、「今日嬉しかったこと」を話すために、朝から寝るまでの行動を振り返ってみる。一日の出来事の中で、「嬉しかったこと」を思い出すことはなかなか難しい。毎日繰り返される仕事や家事の中で、嬉しい出来事は、そう簡単には見つけられない。反省すべきことならたくさん思い出すのに。
　一方、娘は、
「晩御飯の〇〇がおいしかった。」
とか、
「タルト（飼い犬）が甘えてきて嬉しかった。」

「先生がこんな話をしてくれて楽しかった。」
など、ちょっとしたことを嬉しそうに話す。
　学童保育や習い事から帰宅後の、就寝までの短い間、お互いのんびり会話をするような時間はほとんど取れず、日々の生活に追われ、毎日が慌ただしく過ぎてしまう。そんな日常生活の中で、娘と落ち着いて話をする寝る前の数分間は大変貴重で、学校や友達との出来事など、そんなことがあったのか、そんなふうに考えていたのかと、改めて知ることも多い。そして娘の考え方、想いを聞くことで娘の成長を感じるとても良い機会となっている。
　時には、お互いに不機嫌になったり、言い合うことがあり、暗く気まずい雰囲気になる日もある。しかし、それまでがどんな1日でも寝る前のひとつの儀式として、「今日嬉しかったことは?」を合言葉に、娘との時間を必ず持つようにしている。お互い「嬉しかったこと」を思い出して語り合うことで、自然と穏やかな気持ちになり、それまでのわだかまりも解消され、幸せな気分で眠りにつくことができ、翌日の目覚めも気持ちよく迎えられる気がする。
　娘はどんどん成長し、これから反抗期や親離れの時期を迎え、この習慣がいつまで続くかわからないが、今は娘との、この貴重な時間を大切にし、毎日幸せな気分で眠りにつきたいと思っている。

岡山県佳作賞

子どものやる気を持続させるためには

邑久小学校　大河原　崇視

　八歳になる娘が突然、私にこう言った。
「パパ、私、自転車に乗れるようになりたい。」
　娘と自転車との関りは三年前に遡る。
「自転車が欲しい。」
と言い出し、中古の自転車を購入。ほどなく、家の前の道路で練習を始めた。それ以来、これまでに何度か自転車の練習をしてきたが、いずれも長続きせず、もはや家の中のオブジェと化していた。時折、
「小学生になったんだし、そろそろ自転車の練習をしたら。」
「二年生になったら練習始めよっか。」
と促すことがあったのだが、
「私は一輪車に乗れるから自転車は乗れなくてもいいんだ。」
「タイヤが二つもついている自転車は難しくて乗れない。」
そんな屁理屈を言っては、すぐに練習をやめていた、そんな娘がである。
　実は、きっかけがあったのだ。七月に行われた地区のラジオ体操の初日のこと。近所に住む一つ上の学年の小学生が、母親とともに自転車を運転して体操場所にやってきたのだ。娘にとって、彼女の姿は、自分のやる気を引き出すスイッチになる存在だった。
　久しぶりの自転車練習が始まった。私の帰宅後、日没までのわずかな時間を利用し、家の近くの道路で始めたのだが、今回、私が娘の自転車練習に付き合うにあたり、自分の中で決めていたことがある。それは、娘に選択させ、決定させること。これまでの練習で、私は口を出しすぎていた苦い過去があった。
「ここ持って。ここ見て。もっと力を抜いて。」
うまくいかなければ、

「もう一回やろう。」
逆の立場なら、うんざりである。
　自戒を込めた表現になるが、私たち大人は、「こうすればうまくいった」という自分の成功体験があればあるほど、子どもに「大人にとっての正解」を示してきたのではないだろうか。それは半分正解で、半分間違っている。考え方は正しいものでも、それが「その子にとって」正しいものかどうかは別物だからだ。
　憧れの上級生に近づきたいと思って練習を始めた娘に、今度こそ、自分の力で成功を掴み取ってほしいと思った私は、
「今日、どのコースに行く？」
「パパ、自転車のどこを持ったらいい？」
「安全に止まるには、どうしたら良かったっけ？」
など、選択肢を与えはするものの、決めるのは娘に委ねた。また、
「力が抜けて、グラグラがなくなったよ。」
「もう、ほとんど自力で走れてるよ。」
など、娘が漕ぐ自転車について走りながら、プラスの言葉で現状を伝えることに気をつけた。
　スピードに乗るまで、私の支えがないとバランスを崩して倒れそうになることが続いた。これまでは、自分のできなさに嫌気がさし、
「もうやめる。」
と自転車を私に傾け、膨れっ面で家に向かっていた娘だったが、今回は明らかに違った。
「グラグラせずに漕ぎ始めるにはどうしたらいい？」
自分なりに試行錯誤しているようすだった。
　練習初日は私のサポートなしでは乗れなかった。翌朝、憧れの上級生は、再び自転車で体操場所にやってきた。次の日も、その次の日も。
「八月にあるラジオ体操には自転車で行きたいな。それまでに乗れるようになりたいな。」
娘の中で目標が明確に定まった。
　娘は、いつも同じルートで練習を行うことを好んだ。時間も、日没前と決めていた。そのルートではいつも犬の散歩をしている親子に出会った。
「頑張ってるね。」
「もう少しだね。」
その言葉も励みになり、娘は、夕闇迫る田んぼ道を、自転車に乗って体操場所に向かう自分の姿を追い求め、ペダルを漕ぎ続けた。
　数日経って、私が力を加えなくても自分でバランスを取って乗れるようになってきた。そして、八月を迎えようとする頃、私が手を離した状態で初めて十メートルほど進むことができた。
「やったー、私、乗れたー。」
満面の笑みでこちらを振り向いた娘に、私も、
「自分の力で走れてたよ。」
と満面の笑みで応えた。
　八月下旬を迎えた。
「明日は自転車でラジオ体操に行けるね。」
娘は、楽しみで楽しみで仕方がない様子だった。後半の体操初日、玄関先には、自信に満ち溢れた表情で自転車にまたがる娘の姿があった。
　親にとって、我が子の成長は楽しみであり、気がかりでもある。
「〇〇のようになってほしい。」

「〇〇ができるようになってほしい（できれば早く）。」
私は、何かを基準として、我が子たちにあれこれ求め過ぎていたのではないかと自問した。今回、娘をやる気にさせたのは近所の上級生だったが、やる気を引き出す源は無限だ。何がきっかけになるか分からないのが子育ての面白いところだ。一方で、子どものやる気は長続きしなかったり、目移りしてコロコロ変わったりと、不安定だ。でも、そんなものだ、それでいいと割り切ることにした。その上で、親が子どもに選択権と決定権を与え、委ねることで、自らの力でやる気を持続させることに繋がるのではないか。私はこの夏、それを娘から学ぶことができた。

岡山県佳作賞

「私の宿題」

国府小学校　宮本　和子

「宿題は終わっとる？明日の持ち物は全部揃えた？」
今日は８月３１日。夏休み終了日は毎年この声かけから始まります。昨日大物の絵を仕上げたから、もう宿題は終わっているはずだと思っていたら、
「あと家庭科のティッシュケースを作るだけ。」
という返事に驚かされます。
「まだあったん。早く作らんと。」
とはっぱをかけ、どんな物を作るか一緒に考えます。簡単で見栄えがよくてインパクトがあるもの。
「あれが使えるかも。」
ふと浮かんだアイデアを息子と共有します。
「これも使えるよ。」
「それはこのへんに付けよう。」
息子もどんどんイメージが膨らんできたようです。あとは作るのを見守るだけ。ぬい終わりの玉止めが苦手なんだなと気付き、コツを教えて、口は出しても手は出しすぎないようにぐっとこらえるのも大変です。
　やっと作品が完成し、提出物のチェックが終わったのは夜８時過ぎでした。ようやく今年の夏休みも終わったなあとほっとしました。長男が小学校へ入学してから六男が６年生になった２２年。途中切れることなく、小学生の母をやってきました。夏休みには、
「早く宿題をしなさい。」
と言い続けてきたけど、四男が６年生の時、私も自分に宿題を出すことにしました。それが保護者も参加することのできるこの明るい家庭づくり作文です。
　それ以来夏休みの終わり間近になると宿題をする子供達の横で書いたり、皆が寝てから書いてきました。四男は今年２１歳になるのでこの作文の宿題も９年目になります。それは子供達との思いでの記録でもあり、夏休み中の子供達との関わりの反省でもありました。関りが弱いと書けないのです。実際２回ほど書けなかった年もありました。
　来年は六男も中学生になります。小学校のような（親子で読書）や（家族でクッキング）などの親が一緒に取り組む宿題はもう出ないでしょう。大変なこともあったけどちょっと寂しい気がしています。
　私の作文の宿題も今年で最後になりますが、これからもずっと子供達の成長を見守りながら、日々の暮らしを大切にしていきたいと思います。

瀬戸内市優良賞〔小学生の部・中学生の部・保護者の部〕受賞者一覧

題名	所属	氏名
おとうさんはねぼすけ	行幸小学校　1年	三木歓大
おかやまぐらし	行幸小学校　1年	行司彩七
お父さんのびぜんやき	牛窓西小学校　2年	宗髙　輝
大好きなおばあちゃん	邑久小学校　2年	岸田晏菜
私は一番大きいお姉さん	国府小学校　3年	田中　詩
家族とけん玉	牛窓西小学校　3年	福江一揮
わたしに出来ること	牛窓北小学校　4年	柏原希星
わたしの大すきな弟	今城小学校　4年	村上紗桜
ピアノと私とお兄ちゃん	邑久小学校　5年	森上直美
十一才年下の弟が出来た	今城小学校　5年	岩本紗音
私が目指すお母さん	行幸小学校　6年	安達かおる
お母さんはま法の手	今城小学校　6年	瀬濵映美
祖父が教えてくれたこと	長船中学校　1年	近藤　碧
我が家のボーリング大会	長船中学校　1年	太田佳歩
母観察日記	長船中学校　2年	野村奏向
第４回新田家夏祭り	長船中学校　2年	新田　朔
祖母との約束	邑久中学校　3年	佐藤芙季
母の日替わりスープ	長船中学校　3年	酒井佑月
明るい家庭づくり	保護者	平田健二
キャンプ	保護者	橋本美津子

瀬戸内市佳作賞〔小学生の部・中学生の部〕受賞者一覧

題名	所属	氏名
なつやすみのおてつだい	牛窓東小学校　1年	酒井一郎一
あかちゃんがうまれる	牛窓西小学校　1年	畑中　鳳
わたしのいもうと	牛窓北小学校　1年	川本千花菜
わたしのかぞく	邑久小学校　1年	松下咲夢
おてつだい	邑久小学校　1年	舛元竜也
いもうととわたし	邑久小学校　1年	角口愛奈
スペシャル　りょうり	国府小学校　1年	小林愛佳
えがおのまほう	牛窓東小学校　2年	藤井晴大
夏休みのチャレンジ	牛窓北小学校　2年	真木優妃
はじめておにいちゃんになったよ	邑久小学校　2年	水島颯太
大人になったらこんな家族をつくりたい	邑久小学校　2年	楢﨑朔大

題名	所属	氏名
わたしのおにいちゃん	今城小学校　２年	坪井鈴佳
楽しいくらしのために	裳掛小学校　２年	黒井友貴
ぼくとやきゅうとかぞく	国府小学校　２年	嵯峨山夕稀
大すきなおとうさんについて	国府小学校　２年	青木彰吾
わたしのママ	行幸小学校　２年	田井紗彩
おばあちゃんの入いん	行幸小学校　２年	三宅崇太
家族で行ったキャンプ	牛窓東小学校　３年	髙田浩志
ありがとう　けんどばば	牛窓北小学校　３年	松本稜央
おかたづけたんとう大じん	邑久小学校　３年	藤山凜花
家族みんなでがんばるぞ	邑久小学校　３年	正富飛馬
楽しみにしていた家族旅行	邑久小学校　３年	小林拓馬
わたしの家族の一大事	今城小学校　３年	田中希依
お父さんと楽しいおふろ	裳掛小学校　３年	井上四葉
「気持ちを　言葉にすること」	美和小学校　３年	小谷歩夢
わたしの家族でのやくわり	国府小学校　３年	藤原里歩成
わたしのお父さん	行幸小学校　３年	中杉弥晴
いつもとちがう夏休み	牛窓東小学校　４年	武内桃花
そ父のお米	邑久小学校　４年	庄野兼晟
お姉ちゃんがいない	邑久小学校　４年	松本晴輝
たのしいクレープ作り	邑久小学校　４年	福間　花
スーパーバアバ	裳掛小学校　４年	内田菜々
「大好きな　おじいちゃん」	美和小学校　４年	近藤結衣
いい点を取るには	国府小学校　４年	原田幹大
わたしのお父さん	国府小学校　４年	播本弥耶
お母さんはスーパーヒーローだ！	行幸小学校　４年	田中彩翔
我が家のスイカ大しゅうかく	牛窓東小学校　５年	山本望心
がんばる家族のすがたを見て	牛窓西小学校　５年	早瀬沙彩
みんなで作ったじゃがいも	牛窓北小学校　５年	井上夢萌
キャンプ	邑久小学校　５年	安藤茜音
わたしのひいおばあちゃん	邑久小学校　５年	岡部莉望
ぼくの家の笑顔	美和小学校　５年	野﨑直音
楽しかったオランダ生活	国府小学校　５年	小野田讃音
ミミが私に教えてくれたこと	行幸小学校　５年	播本　花
大好きなお父さん	行幸小学校　５年	西　晟吾
おじいちゃんの焼き板	牛窓東小学校　６年	森　愛優菜
星になったぼくのおばあちゃん	牛窓西小学校　６年	爲房波琉

題名	所属	氏名
私と、家族と、明るい家庭作文	邑久小学校　６年	田村千糸
兄の部活動	邑久小学校　６年	國重結愛
家族と明るくすごすために	邑久小学校　６年	神寳杏蒔
おくりもの	邑久小学校　６年	北野くるみ
私の家族	美和小学校　６年	門田杏沙
父のお手伝い	国府小学校　６年	中司遥翔
私のひまわり	国府小学校　６年	柴田彩衣
家での役割分担	行幸小学校　６年	竹本千夏
世界でたった一人のお父さん	牛窓中学校　１年	岡　己珠
私の家族	邑久中学校　１年	田原叶望
花火大会	邑久中学校　１年	山﨑勇歩
楽しかった東京	邑久中学校　１年	北村莉菜
僕のひいおばあちゃん	長船中学校　１年	志津空哉
感謝を伝える	牛窓中学校　２年	松下紗衣
明るい家族・家庭づくり	邑久中学校　２年	原田直紀
お父さんの存在	邑久中学校　２年	久保田東揮
私のお姉ちゃんと妹	長船中学校　２年	山下翔乃
私は第二の母。	長船中学校　２年	武内美空
家族のためにできること	牛窓中学校　３年	岡本優奈
家族に感謝　～ありがとう～	邑久中学校　３年	上村彩寧
私のために…	邑久中学校　３年	根岸杏子
働き者のお母さん	長船中学校　３年	當瀬恋苺
「おばあちゃんとの食事」	長船中学校　３年	長谷川優愛

ほがらか家族

明るい家庭づくり作文集
（瀬戸内市優秀賞受賞作品）

令和６年２月発行

編集発行
瀬戸内市教育委員会
岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会
〒７０１－４３９２　瀬戸内市牛窓町牛窓４９１１
瀬戸内市教育委員会社会教育課内